

北川村「モネの庭」マルモッタン

藤原 道夫

5月中旬「高知満喫の旅」のツアーに参加して初めて高知県を訪ね、牧野植物園や高知市内の市場など興味深い所を数か所見物した。以下に「モネの庭」を見ながら思い巡らしたこと。

北川村「モネの庭」マルモッタンは、高知空港からバスに乗り海岸沿いに東方へ1時間余走った所にある。ここは村おこしのため、ジヴェルニーにある旧モネ邸の責任者による指導の下にフランス芸術アカデミーの許可を取り付け、2000年に作庭されたとか。マルモッタンはパリにあるモネの絵画を多く展示する美術館の名。箔をつけるために借用したのだろう。

若いガイドと庭師の案内で庭を見学した。ジグザグの坂を登ると「水の庭」の入り口に、すぐ緑色の欄干が見えてきた。10メートルほどの太鼓橋の上から幅が狭く細長い池を見渡す。今季咲き始めたばかりの睡蓮の花が点々と望めた。周りに柳の樹も植えてあるが、土壌のせいで枝が垂れ下がる様に育たないとか。水辺には色とりどりの花々が咲き乱れている。

他の庭（ヒナゲシの丘、ボルディゲラの庭、花の庭）も見学してから一人「水の庭」に戻り、しばし池のほとりに佇んだ。

想いはジヴェルニーの旧モネ邸内にある池に及ぶ。訪ねたのはもう30年前のこと。真夏の午後、強い陽ざしが睡蓮に降り注ぎ、高い柳の樹から垂れさがる枝が細かく揺れながら水面に濃い影を落としていた。時折陽ざしが雲に遮られると、池全体の光景が一変する。

モネは1890年ここに邸宅を建て、3年後に隣の土地を購入して池を造成し、睡蓮を植えた。以降、朝・昼・晩と日ごとに変わりゆく睡蓮の花咲く池の風景に魅せられ、一連の「睡蓮」を描いてゆく。絵を眺めるほどに、睡蓮や池の周りの草木の輝きと影とが、様々な色と工夫されたタッチでキャンバスに描き込まれているのが見てとれる。花は素材の一つに過ぎないよう。目が弱中「睡蓮」の絵を沢山描いたが、日々刻々変わる印象はいくら描いても完結することはなかったろう。

北川村の「モネの庭」には風がそよとも吹かず、池の水面は鏡のようで睡蓮の間にどんよりした空を映すのみ。時間が止まったようで、移り行く光も影も感じとることができなかった。これも自然の一つの姿なのだ。それにしても、背の高い柳が2、3本あって枝垂れる枝が池面に影を落としていれば、風景のアクセントとなったであろう。あれこれ空想しているうちに時間が過ぎてしまい、集合場所へと急いだ。